

日本組織培養学会

昭和51年7月15日発行

会員通信

第29号

発行責任者

※佐藤温重・※梅田誠

※※加納永一

※横浜市南区浦舟町 横浜市大・医学部

※※京都市東山区山科御陵 京都薬大

§ 第42回研究会開催について

高野宏一 世話人のもとで別項(色頁)の要領で開催される。

§ 幹事会および総会議事録

5月27日、博多会館において幹事会が開かれ、下記の案件について討論が行われ、総会にはかられ、一部を除き承認された。

なお、幹事会出席者は、難波、二階堂、丸野内、加納、江村、湊、の各幹事、佐藤(弘)、野瀬前幹事、山田会計担当、佐藤(温)、梅田会員通信担当、乾ビブリオグラフィー担当、高木世話人、高野次回世話人であった。

- (1) 幹事改選に伴い、幹事長を川崎医大の難波正義氏に依頼することが決定。
- (2) 新幹事： 会員通信第28号に発表されたように、幹事選挙の結果、後藤、湊、江村、加納の新幹事が選出された。
- (3) 会計報告： 担当の山田幹事から別項のように昭和50年度(50年1月～12月)の会計報告があり、承認された。
- (4) 会費値上： 本学会の収入は、昭和46年からほとんど増加してなく、今後も大巾な増加は期待できない。一方、今年から通信費の値上りにより支出の増大が必至なので51年度から会費を、一般会員年2,000円、賛助会員一口1万円とする。入会金は変えない。この案件は総会において承認された。
- (5) 入会方法： 現在、本学会会員になるには、申込書に推薦会員2名の印をもらい幹事会にはかって承認することになっている。この方法だと入会希望者が幹事会の開催される時期まで待たされることがあり不都合なので、会員の推薦があれば自動的に会員にしたかどうかという提案が山田会計幹事からなされた。しかし、これは今後の会の性格にも影響することなので、十分討議して決めることとなった。
- (6) 会員通信： 原稿の集まりがいつも悪いので、会員各氏から積極的に原稿を送って下さるよう要望があった。また、会員通信を受取らない人がかなりあるが、事務センターからの発送は間違いなく行われているので、住所又は所属の変更があったら至急学会事務センターに届出て

頂きたい。なお事務センターは、東京都文京区弥生2-4-16、学会センタービル内にあり、電話は03-815-1903、培養学会担当は、萩生田氏です。

(7) ビブリオグラフィー： 昨年、これの存続についてアンケートを行った際、圧倒的に存続に賛成の人が多かったが、原稿を送ってくる会員が少ない。文部省の補助金を受けている関係上ページ数を減らせないので会員の発表した論文の要旨は、確実に担当幹事宛、送って頂きたい。

(8) 次回研究会： 下記の要項で開催する。

世話人： 日本ロシュ 高野 宏氏

会 期： 11月12日、13日

場 所： 渋谷、薬学会館

(9) 次々回研究会： 世話人、川崎医大、木本哲夫氏

(10) その他： 会費未納者は、2年以上滞納した場合幹事会で審査して退会とする。

別項の新入会員、新入賛助会員はすべて承認された。

(文 野 瀬)

§ 昭和50年度会計報告

前年度よりの繰越金	787,105	
50年度実収入	816,649	
50年度実支出		1,117,865
次年度への繰越金		485,889
合 計	1,603,754	1,603,754

内 訳：

収 入		支 出	
正会員会費(315件)	360,000	各種刊行費：	
賛助会員会費(24件)	311,000	ビブリオグラフィー	357,940
文部省刊行補助金	130,000	会員通信(№25-28)	113,900
雑 収 入	6,175	会 員 名 簿	188,810
銀 行 利 息	9,474	研究会補助：	
		(№ 40)	50,000
		学会誌センター：	
		業 務 委 託 費	284,960
		通 信 費	97,055
		事 務 費	25,200
小 計	816,649		1,117,865
繰 越 金	787,105		485,889
合 計	1,603,754		1,603,754

§ 第41回研究会を終つて

高木良三郎（九大医療短大部）

5月28(金)、29(土)の両日、博多で日本組織培養学会第41回研究会が開催されました。前回の博多における研究会から丁度10年目にあたります。会員の皆さんの御協力をえて、大過なく終了できましたことを感謝しております。本研究会は会期が2～3の他の学会と重複したのですが、多数の会員、非会員が参加され、九電ビル本館地下のホールは開催両日ともほぼ満員でした（登録参加者は会員86名、非会員128名）。

今回の研究は一般演題16題で、それにレクチュアとシンポジウムの2つのセッションを設けてみました。第1日午後の“組織培養の手法とその問題点”のレクチュアは、本研究会でははじめての試みでしたが、座長の遠藤（浩）、奥村両氏の名司会により、5人の講師の長年にわたる貴重な体験からにじみ出る迫力ある講演に対し、熱心な討議が繰返されました。会員外の参加者にはやや離解な点もあったかと思いますが、このような組織培養の原点に帰ったテーマは、本学会においてのみとり上げうるものではないでしょうか。なお講演時間はもっと充分にとるべきであったと反省しております。

シンポジウムは第2日の午後行いました。テーマは“Functional Cultures”で、神経細胞腫の外は正常細胞に限定し、黒田、安村両氏には企画の段階から御力添えねがい御苦勞をかけました。この難題にいとむ各演者の“労作”の発表にはバイタルな意気込みが感じられ、両氏の名解説とあいまって本研究会をしめくゝるにふさわしく、シンポジウムを爽りある盛り上ったものとしたしました。“Functional Cultures”の道未だ遠しといえども、10年前にくらべ確実に進歩のあとがうかがわれ、さらに今後の発展への期待をつないだ次第です。

組織培養学会について、入会希望を含めてかなりの問合せがありました。研究会がオープンである以上、できるだけ多くの関係研究者に研究会の開催を広報し、組織培養のインフォメーションを流す方法を具体化すべきであろうと思います。また総会でも議題にのぼった入会手続きをはじめとする諸問題——組織培養学会のこれからのあり方——についても、できるだけ早く検討すべき時期にあると考えます。組織培養学会の会員は将来さらに増加することが予想され、これはよろこぶべきことでありましょう。しかし学会が大きくなるとともにおこりがちな“形骸化”は絶対にさけねばなりません。あくまでも本学会を開設された諸先輩の精神を失うことなく、純粋に学問、研究のための学会であり、誰にも気がねすることなく自由に発言が許され、熱心な討議がなされる、外観より内容の充実した研究会でなければならないと思います。そのような意味でのすがすがしさ、ユニックさ（本当はそれがあたりまえでなくては困るのですが）を持ち続けたいものです。

さいごに、座長各位、レクチュア、シンポジウム担当の諸氏ならびに本研究会に御参画いただいた会員の皆さんに厚く御礼申し上げます。

§ Ephussi 博士の研究室

小 山 秀 機

1973年11月から1年間フランスの Boris Ephussi 博士の研究室で働く機会にめぐまれたので、その時の簡単な印象記を述べてみたい。

Ephussi 博士の研究室は、パリ郊外 Gif - sur - Yvette に 10 以上の研究室からなり、フランス国立科学アカデミーに属する研究センターの一つである分子遺伝学研究所にある。博士はこの研究所の名譽所長で、現在は酵母遺伝学の スロムニスキー博士が所長であった。Ephussi 博士は常に世界をリードしてきた遺伝学者で、73才とはいえ科学に対する情熱はいささかもおとろえていなかった。衆知のごとく、1960年以来の雑種形成法の基礎的研究と、それをもちいた分化の研究は一世をふうびしたものである。現在彼は Teratoma の分化に興味をもち、研究を進めていた。目標はなんとか試験管内で望む組織に分化させる条件を見出すことであった。フランスではパスツール研究所の Jacob が研究室あげて同じ問題にとりくんでおり、Ephussi 博士は非常にライバル意識をもっている様であった。私はこの Teratoma と Neuroblastoma の雑種細胞のアルカリホスファターゼに関する研究をおこなったが、Teratoma という興味深い材料を知りえたのは大変良い収穫であった。

研究室にはアメリカより Ephussi 博士とともに移った Mary Weiss 博士がいた。彼女は 30 才なかば、静かな魅力的な女性である。仕事は分化機能を残しているモリス Hepatoma と他の細胞の雑種をつくり、その機能のゆくえを追っていた。またアメリカより 2 人、イギリスより 1 人のポスドクと 2 人の大学院生、5 人のテクニシャンが Ephussi ないし Weiss 博士について研究していた。

研究室の設備は培養と生物学的には十分であるが、私の従事した生化学的研究には十分でなかった。しかし、研究者一人に約一人のテクニシャンと、器具の洗浄滅菌のお婆さんが 3 人（よく働く）いる点などが、日本の研究室にくらべて大変義やましく感じられた。

分子遺伝学研究所は樹木がうっそうとしげる丘の中腹の古城にあった。この中庭のレストランのワインを飲みつつ 1~2 時間にわたる昼食は、この国の人々のゆとりを考えさせた。また、時としてすばらしいアイデアを生み出すフランス研究者の土壌が、デカルト的合理主義と長い科学的伝統に加えて、この人間的ゆとりにあると思わずにはいられなかった。

§ 日本組織培養学会会員の皆様へ

スタンフォード大学 ハイフリック研究室より、癌ならびに老化研究の近況報告

松 村 外 志 張

Leonard Hayflick 博士は一昨年日本を講演旅行されたので、御存知の方も多いことと思います。正常人由来の線維芽細胞の研究を通じて、癌、老化ならびにウイルス学の各分野に貢献され、又、マイコプラズマの研究でも活躍されています。

スタンフォード大学はサンフランシスコ南方にあって、米国一の敷地をもつ私立大学ですが、近代的なビルが立ちならぶ、カリフォルニア大パークレイ校と対照的に、レンガ作りの低い建物が森の中に見え隠れし、さらに大学の一部は牧場となっているという風で、一体この大学のどこで現代科学をやっているのかと思えるほどです。

ヘイフリック研の属する医学部微生物学教室も、そういった古い建物の一部を使っており、昔は馬が繋がれていた所だったということです。この古い建物に隣り合せて、Cancer Virus Building という標識が立っており、ここに2つの小さな平屋の建物があって、やはりヘイフリック研の一部となっています。現在、3人の研究員、1人の客員教授、2人の事務担当、6人の技術担当あわせて12人の陣容です。小生もこのグループに参加する機会を与えられて、もう一年半近くになりました。ヘイフリック研の研究の背景は省略させて頂き、直接トビックスに入ります。

1. 人正常細胞の試験管内発癌の試み

Ms.R.S.Leith 難波正義博士らによって、WI-38、その他の人線維芽細胞の化学発癌が試みられて来ました。これらの研究はまだ未発表ではありますが、何と云ってもヘイフリック研の大財産です。アメリカは、せち辛いと聞いていましたが、未発表データをつみかさねながらこのように息の長い研究も進められていると、大いに喜こんだ次第です。試験管内発癌過程に含まれると思われる2つの素過程、即ち寿命ある細胞から寿命のない細胞への変換、それから造腫瘍性の獲得のうち、特に前者に問題をしばって、小生も若干努力を続けています。特に増殖を停止した人線維芽細胞の定量、増殖を停止した細胞集団の長期維持中での特長づけを行っています。

2. 老化の研究に対しては、正常人由来線維芽細胞の寿命が核と細胞質のどちらが主に制御しているかという問題を核の入れかえ実験でせまろうというのがヘイフリック博士の1つの希望で、小生が到着したころは、大学院生W.Wrightによって、サイトカラシンBを用いる核ぬき、HVJを用いる膜の融合を組合せた方法でいこうという基本方針は出来ていました。その後、W.Wrightは卒業し、代って英国よりアメーバの核の入れかえの経験を持つ、Ms Audrey Harrisが加わり、サイトカラシン、HVJに加えて顕微鏡解剖法もつぎこんで、研究が進められて来ました。現在、WI-38細胞同志で核の入れかえが成立したことが、口頭で発表された段階です。技術的な、問題がまだいろいろありますが、HVJによる細胞融合法が細胞遺伝学に果たしたような大きな役割を、細胞質遺伝の研究に果せるかどうかということで、ヘイフリック博士の熱の入れかたは大変です。この研究のほか、米国中での人細胞を用いる老化の研究プロジェクトの中核として7年間にわたり、WI-38細胞の供給業務が行なわれて来ました。最近NIHに老化研究所(NIA)が創設されるに及んで、業務が引きつがれました。

3. マイコプラズマの検査

ヘイフリック研は米国内の多くの研究者からマイコプラズマを受けとり、検査する業務も行

って来ました。培養に共生するマイコプラズマは、人由来(研究者)牛由来(血清)豚由来(トリブシン)がほとんどということですが、豚由来の M. hyorinis は従来用いられている寒天培地で100%検出を期することが出来ないことが最大の問題点だということです。現在 G. K. Masover 博士らを中心に検査法の開発が試みられています。又これとは別に, Ureaplasma (T株マイコプラズマ)という一群のマイコプラズマの研究が G. K. Masover, S. Razin 両博士によって進められています。

さて緑と太陽にめぐまれた自然のなかで、顕微鏡をのぞいてくらすのはどんなものだろうという問題についてかなりの人はうすうす感じているようであります。なかにはあからさまにカリフォルニアぼけを主張する人(つまりみんなカリフォルニアが悪いんだ!/)もいます。ヘイフリック博士の意見は断然肯定的で、温和で平和な環境は研究の発展を促しさえすれば阻害することはないという考えです。学生さんも、大方はうまい具合にやっているようです。緑も太陽も目に入らないように夜中の12時まで図書館で頑張っている学生は非常に多く、一方で俺はここにいたいんだと泣きこむところを、成績表をつきつけられて落ちのびていく人もあるようで、恵まれた世界なりに苦勞もあるようです。

では又皆様お元気で、なおヘイフリック博士の移動にともない、スタンフォードにおけるヘイフリック研は近い将来看板をおろします。

§ "Index of Tissue Culture 1975" について

J. Natalia Stahl for The Tissue Culture Association (Ed. by), pp. 741, Tissue Culture Association, Rockville, Md., 1976.

(A guide to literature in the field, sponsored by The Tissue Culture Association in cooperation With the National Library of Medicine)

Tissue Culture Association
c/o Biomedical Research Institute
12111 Parklawn Drive
Rockville, Maryland 20852, U.S.A.

丸善經由より(\$ 52 位)直接購入の方が安いし早い

§ 編集後記

会員通信夏号は、高木、小山、松村の諸氏の原稿を頂き、充実したものになりました。

本号7頁~11頁は新入会員などの名簿ですので、切りはなし、既に配布した会員名簿にとじこんでいただくと便利かと思ひます。(S)

§ 昭和 51 年 6 月 新入会員名簿

研究機関	同住所・電話	氏名	専門分野
東北大学医学部 第二外科	980: 仙台市星陵町 2 の 1 (0222) 74-1111	林 富	小児外科
日水製薬 K K 開発研究部培地 試薬品質管理室	340: 埼玉県草加市稻荷町 1805 番地 (0489) 35-1631	吉川 清美	組織培養
順天堂大学 内科	113: 文京区本郷 2-1-1 (03) 813-3111	冢本 武	循環器 (心臓血管病)
順天堂大学医学部 内科	113: 文京区本郷 2-1-1 (03) 813-3111	太田 一郎	循環器
順天堂大学医学部 循環器内科	113: 文京区本郷 2-1-1 (03) 813-3111 内線 303	小川 雅博	循環器学
東京都老人総合研究所 薬理学	173: 東京都板橋区栄町 35-2 (03) 964-1131 内線 3071	三井 洋司	細胞生物学
東京都臨床医学 総合研究所 消化器部門	113: 東京都文京区本駒込三丁目 18 番 22 号 (03) 823-2101 内線 5263	山崎 富美子	消化器薬理学
恆東製薬工業株式会社 府中工場	183: 東京都府中市四谷 6 丁目 48-1 (0423) 66-1513	松橋 佑了	組織培養
合同酒精株式会社 中央研究所	271: 千葉県松戸市上本郷字仲原 250 (0473) 62-1158 内線 80	(代表者) 入江 淑郎	
日本専売公社 中央研究所 生物実験センター	257: 神奈川県秦野市名古木 23 (0463) 81-1277	津田 弘久	細胞生物学
日本専売公社・中央研 究所生物実験センター 第 2 研究室	257: 神奈川県秦野市名古木 23 (0463) 81-1277	西 義介	細胞生物学 実験発癌
京都薬科大学 生物学教室	607: 京都市東山区山科御陵中内町 5 (075) 581-3161	池淵 誠	放射線生物学
京都薬科大学 生物学教室	607: 京都市東山区山科御陵中内町 5 (075) 581-3161	宮越 順二	放射線生物学
長崎大学医学部 附属病院 第 2 外科	852: 長崎市坂本町 7 の 1 (0958) 47-2111	木田 栄郎	消化器外科
九州大学医学部 放射線	812: 福岡市東区大字堅粕 1276 (092) 641-1151	佐々木 弘	放射線科
九州大学医学部 第 1 内科	812: 福岡市東区大字堅粕 1276 (092) 641-1151	山上 裕司	内科
九州大学医学部 第 1 内科	812: 福岡市東区大字堅粕 1276 (092) 641-1151	小野 順子	内科
大塚製薬 K K 徳島工場 第 3 研究所・第 2 毒性	771-01: 徳島市川内町加賀須野 463-10 (0886) 65-2126	前田 由美子	細胞生物学

研究機関	同住所・電話	氏名	専門分野
中国台湾省台中市 中山医学专科学校 医学部解剖学教室	中国台湾省台中市南区大慶街 2段113号	李 政 雄	解 剖 学

§ 昭和51年6月 新入賛助会員

賛助会員	同住所・電話	連絡者
株式会社・医学生物学 研 究 所	458:名古屋市緑区鳴海町四本木 16-3 (052) 622-5261	西 田 克 彦

§ 日本組織培養学会1976年度会員名簿の訂正, 変更

1) 訂 正

	(誤)	(正)
P. 5 住所欄 上から1行目	千葉市亥鼻町1-8-1	千葉市亥鼻1-8-1
上から3行目	内線234,235	内線234,232
P. 30 住所欄 上から1行目	065:札幌市北区麻生町 1-801-677	001:札幌市北区麻生町 1-7-8
(上から2行目)	(北海道工業大学教養部とその所在地等は不要)	
P. 34 住所欄 下から11行目	Tel.Lyon 69.81.45	Tel.Lyon 758181

2) 住所変更

	(旧)	(新)
P. 1 佐々木 元 賢		長崎大学医学部 口腔基礎医学講座 852:長崎市坂本町12-4 (0958) 47-2111
P. 2 名 和 橙黄雄	旭川医科大学 解剖学第一講座	岩手医科大学歯学部 口腔解剖学第二講座 020:盛岡市中央通1-3-27 (0196)51-5111 内線4512

		(旧)	(新)
P. 2	小林 和夫	農林省家畜衛生試験場 東北支場	農林省家畜衛生試験場 北陸支場 945-03: 柏崎市松波 4-7-18 (02572) 2-6118
P. 5	橋 爪 社	千葉県血清研究所 第2研究部	千葉大学看護学部 病態学講座 280: 千葉市亥鼻1-8-1 (0472) 22-7171 内線 597
P. 5	興 貴美子	労働省労働衛生研究所 職業病部	労働省産業医学総合研究所 職業病部 215: 川崎市多摩区長尾 6-21-1 (044) 865-6111
P. 5	大 沢 基 保	" "	" "
P. 9	田 島 和 行	慶応大学医学部 病理学教室	東海大学医学部病理学教室 259-11: 伊勢原市望星台1 (0463) 93-1121
P. 11	丸野内 楳	三菱化成生命科学研究所 発生生物学研究室	" " 細胞生物研究室
P. 11	高 野 宏 一	製品企画開発センター	開発本部
P. 22	生 方 厚	大阪大学医学部 第2解剖学教室	560: 豊田市西緑丘 2-2-2-212号
P. 28	青 山 喬	長崎大学医学部 原爆後障害医療研究施設	滋賀医科大学放射線基礎 医学教室 524: 滋賀県守山町 (07758) 3-2115
P. 36	アミコン・ファー・ イースト・ リミテッド		102: 東京都千代田区九段 北4-1-11 原鉄ビル7階
P. 36	第一化学薬品 株式会社	(連絡先) 販売部試薬課 佐々木 邦 郎	化学薬品部化製品課 日 暮 喜八郎

3) 外国出張中の会員

- P.10 *○ 関 口 豊 三 Toyozo SEKIGUCHI
c/o Dr.Prof.Henry Harris
Sir William Dunn School of Pathology
University of Oxford,
South Parks Road,
Oxford,OX1 3RE
England.
- P.12 * 筒 井 健 機 Tateki TSUTSUI
Division of Biophysics,
Department of Biochemical and Biophysical
Sciences,
School of Hygiene and Public Health,
Johns Hopkins University,
615 North Wolfe Street
Baltimore,Maryland 21205,U.S.A.
- P.13 * 花 岡 文 雄 Fumio HANAOKA
c/o Dr.Gerald C.Mueller
McArdle Laboratory for Cancer Research
University of Wisconsin
Madison,Wisconsin 53706,U.S.A.
- P.14 * 野 瀬 清 Kiyoshi NOSE
c/o Dr.John Paul
The Beatson Institute for Cancer Research,
132 Hill Street,Glasgow G 3 6UD,
Scotland,United Kingdom.
- P.14 * 松 村 外 志 張 Toshiharu MATSUMURA
Department of Medical Microbiology
Stanford University,
Stanford,California 94305
U.S.A.

P.14 * 森 庸 厚 Tsuneatsu MORI
Department of Microbiology
State University of New York at Buffalo
School of Medicine
335 Sherman Hall Buffalo
New York 14214
U.S.A.

日本組織培養学会第42回研究会

第42回研究会を下記により開催することになりましたので御案内申し上げます。

1. 会場 : 薬学会館ホール(2F)
東京都渋谷区渋谷2丁目12番15号 電 代表 03-406-3321
2. 日程 : 11月12日(金) 午前 一般講演・総会 午後 一般講演・夜懇親会
11月13日(土) 午前 一般講演 午後 Symposium
なお、幹事会は11月11日(木) 午後5時より山の上ホテルにて行ないます。
(山の上ホテル 住所:お茶の水 電:293-2311)
3. 研究会参加費 : 2,500円 懇親会費:2,000円
4. 講演申込み締切 : 同封の講演申込み票(一枚)に記入のうえ、8月14日までに送付して下さい。
5. 抄録原稿締切 : 講演申込みの方には抄録用原稿用紙(一枚)をお送りしますので、9月14日(火)までに当方に必着するよう御返送下さい。
6. 講演時間 : 講演、質疑応答を含めて、一人30分を予定しています。
7. 宿 舎 : 各人で御手配下さい。
8. 講演申込み先および連絡先 : 〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル 8F
日本ロシユ(株) 開発本部気付 高野 宏 一
電03-214-5370 内線 401, 403
(AM 8:30 ~ PM 5:15)
9. Symposium : 神経筋細胞をめぐって(別項参照)

キ リ ト リ セ ン

日本組織培養学会第42回研究会講演申込み票

〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 富士ビル 8F
日本ロシユ(株) 開発本部気付 高野 宏 一
一般講演・Symposium (御希望の方に○印をつけて下さい)

演 題 :

(ふりがな)

発 表 者 氏 名 : (演者に○印をつけて下さい)

連 絡 先 :

プ ロ ジ ェ ク タ ー : (1台しか使用できません)

16mm 映 写 機 : 要 不要 (いずれかに○印をつけて下さい)

その他の希望事項 :

締切日 8月14日(水)

別 項

Symposium : 神経筋細胞をめぐって

組織培養学会が発足した20年程前のころには毎回の研究会に神経組織の培養手技・形態と機能ひいてはこの特殊な材料をとり扱うことによって組織培養法そのものの医学生物学における意義が多様の方向から論じられたものでした。臓器培養・細胞培養の手技・方法がそれぞれの方向に可能な限り伸展し、又相互に総合的な考え方の必要を感じ始めている現在に、この分野に取材した Symposiumを開いて進歩の跡を辿り、温故知新のセンスを通じて更に未来への発展を希むのは意義あることと考えます。多勢の方々の御参加を希望します。更に他の分野からの超客観的質疑も大いに観迎致します。

(附 記)

栃木・福岡とすばらしい開催地の後をうけて今秋東京での研究会のお世話を申しつかりました。何方にも珍らしくない東京で、何かと新しい感じの試みは出来ぬものかと無い知恵をしぼってはみたものの、結局何ともならず平凡な企画に落ち着きました。それどころか参加費、懇親会費をグッと値上げしないとどうにもならず、今迄の世話人をうらめしく思いながら心苦しく感じている次第です。何卒不悪多数の御参会を希って居ります。

(高 野 記)

1976年 Bibliography 原稿募集

本年も Bibliography 編集の季節になりました。下記の如く原稿を募集致しますので、1975年の年号のついた論文の英文抄録を漏れなくお送り下さい。

1. 締 切 : 昭和51年11月30日
2. 宛 先 : 東京都中央区築地5-1-1
(〒104) 国立がんセンター
生化学部 佐藤茂秋
3. 執筆要綱 : 昨年、一昨年に同じ。(写真印刷致しますので、抄録は電動タイプ(打抜きカーボン紙)を使用し、スペース内に必らず治めて下さい。)
4. 抄録用紙 : 本会員通信に各一部同封致しますが、余分に必要の方は 佐藤茂秋宛お知らせ下さい。

毎年のことながら、原稿の集まりが悪くて編集者一同発行に際し苦勞致します。本年こそは、1回の原稿募集でBibliography が発行出来る様、皆様の御協力をお願い致します。

昭和51年7月

乾 記